

# エルニア王女

2014/2/9

Var. 1. 02

シナリオ：HANABUSA

サークル名：ケチャップ味のマヨネーズ

## ■登場人物

### ●エルミニア王女●

さる王国の王女。

政略結婚で隣国のエルネスト王子と結婚することになるが、事實はただの人質として差し出されていた。

エルネスト王子は人当たりが良く優しい性格をしている反面性的に倒錯しており、非道なる調教を受ける毎日を過ごしている。

芯は強く、快樂を受けても堪え忍ぶが、徐々に辱められることに快感を覚える。

### ●エルネスト王子●

エルミニア王女の結婚相手。

表の顔は心優しい王子だが、裏の顔は女性をおもちゃにして非道なことを繰り返すサディスト。飼い慣らした触手型の魔物をけしかけ、女性を性的に貶める。

※本編ではしゃべりません。

## 【あらすじ】

自分が人質だと知りながらも、エルネスト王子に心を開かないエルミニア王女。

自国にいる王や民のために言いなりになりにはなっているが、

心を決して開かないエルミニア王女に、エルネスト王子が非道なる性的な調教を始める。

自国を守りたいという心と、その心をくじくように襲いかかる肉欲。

快樂と自国の存亡を天秤に掛けられ、絶望の中、エルミニア王女は快樂を選んでしまい、生まれ育った国と親を失うことになる。

「今日も城下（じょうか）は平和そのものね。ここからの眺めは、私の国によく似ているわ……」

「お父様……お母様——それにお兄様は、元氣にお過ごしでしょうか……」

「私がこの国に嫁（とつ）いだことで平穩を取り戻していることでしょう」

（足音・近づいてくる）

「あつ……エルネスト様……。後ろから抱きつかなくても……」

「ここでは、臣下（しんか）に見られてしまいます」

「私に付いてきて欲しい所があるのですか？ 分かりました」

「ふふふつ、あなたに付いていきます」

（足音・遠のく）

（足音・近づいてくる）

（重いドアが開く音）

「……………」

「こんな地下に私を連れてきてどうするつもりなの？」

「私を調教するって……何故そんなことをする必要があるのか、私にはよく分からないわ」

「私は、エルネスト王子の事を——」

「……………」

「私は……あなたのことを……愛しています」

「……………」

「何故笑うの？ 私は、エルネスト様……あなたの后（きさき）なのに？」

「本当に愛しているのなら、それを証明してみせろ……と？」

「……………」

「どうすれば、それを証明できるというの？」

「愛しているのなら、何をされてもそれを愛情として受け入れることが出来る」

「——と言われても……」

（どんと壁に押しつけられる音）

「きゃああつ！！ 急に何を……ッ！！ 痛いッ……！！」

「私は……自分を偽（いつわ）ってなんて……ない……」

（どんと壁に押しつけられる音）

「痛い……ッ！！ 何が……何があなたを怒らせているのか、私には全然分からない」

「私の目が、氣に入らない？ 蔑（さげす）むような、哀（あわ）れむような目で見るな……と？」

「何の冗談なのか分からないけど、私はあなたをそんな目で見たことは——」

「——くっ」

「自分の立場は、ちゃんと分かっているわ」

「あなたに逆らえば、どうなるかということくらい——」

「私のことが気に入らなければ、あなたの気の済むようにしていいわ」

「私は、そうすることしか出来ない、とらわれの身なんだから——」

「私は、あなたの……この国に捧げられた生け贄のような物」

「そして、私はただの愛玩動物に過ぎないことも」

（ガシャンと手枷足枷を付ける音）

「手足を繋いで、何をするつもり？」

（ジャラツと手足が鎖に繋がれる音）

「私が一言、あなたのことを愛しているとさえ言えば、許してくれるとでも言うの？」

「幼い頃のあなたはもっと純粹で、まっすぐで、好きだったのに。今のあなたは——」

（頬を平手打ちする音）

「——ッ！！ そうね。これ以上は言われたくないものね」

「今から楽しい遊びをする？」

「今のあなたの顔、人に見せられたものじゃないわね」

（ウネウネと触手が這う音）

「それは……魔物？」

「そんなものが城の地下にいるなんて、どうなっているのかしら——？」

「……………」

「罪人を処刑するために、飼い慣らされた……魔物？」

「そんなものを持ち出して、私を脅すの？」

「逆らえばどうなるのか——。それくらい、私に分らないとも思ってた？」

（ウネウネと触手が這う音）

「……………う——」

（ジャラツと鎖の音）

「うっ……ううう……こんなので……私を辱（いじ）めるつもりなんて……」

（ウネウネと触手が這う音）

「身体（からだ）にまとわりつく触手がうねるようにして……身体（からだ）に這（は）い回ってくる……」

「ふううう……胸が……締め上げられて……乳首に……絨毛（せんもう）が……ぐうううう……」

「……………」

「こんなことで……悲鳴を上げると持っていたの？」

「残念ね。この程度の辱（いじ）め、私には無意味だわ」

「私には、守るべき国と民（たみ）がいるのだから……。私の心は死なない限り、折れない……」

（ウネウネと触手が這う音）

「うっ……んぐうう……うっ……」

「感じてなんか……いない……ッ！ 魔物相手に、感じてなんか……」

「こんな魔物を操（あやつ）り、女を辱（いじ）めるなんて、エルネスト王子……」

「今のあなたにぴったりの下僕（しもべ）ね」

（ウネウネと触手が這う音）

「あうっ……うううう……んっ……んっ……先端ばかり、責めるなあ……ッ！！」

「……こんなことをして、何が楽しいの？」

「私を……淫らな雌に堕（お）したいだなんて……それは本気で言っているの？」

「その薄ら笑いを見ると、本当にそうしたいのね」

「それなら、思う存分そうするといいわ」

（ウネウネと触手が這う音・激しく）

「んう……身体（からだ）の上を……ナメクジが這うような感じが……」

「ぬるっとした粘液が、身体（からだ）について……くっ……気持ち悪い——」

「満足そうね。そんなに私が魔物に攻め立てられるのが楽しいのかしら？」

（ウネウネと触手が這う音）

「私には……無駄なことよ……んっ……ふううう……んっ……」

（ウネウネと触手が這う音・激しく）

「くううう……うっ……乳首の先っぽがジンジンしてきて……どうしたの？ うううう……」

「この魔物……普通の魔物じゃない……な、なんなの……？」

「身体が……疼（うず）いて……ああああ……」

「……………っ！？」

「淫魔……ですって？ そんな魔物を召喚して……」

「自分が何をしているのか……分かっているの？」

「……………」

（ウネウネと触手が這う音）

「それだったら尚更……くふう……っ！！」

「あなたの辱（いじ）めに……屈（くつ）することは出来ない——」

「それでいいって……どういう意味なの——？」

「強く抵抗する女が、快楽に抗（あらが）えず淫らに堕（お）ちていく様（さま）を見たい……」

「抵抗が強ければ強いほど、楽しみ甲斐がある——」

「とんでもない変態ね……女を苦しめて、そこに愉悦（ゆえつ）を感じるなんて——」

（パチンと指を鳴らす音）

（ウネウネと触手が這う音・激しく）

「んああ……あつ……くっ……ううう……んんん……っ！」

「はああああつ、んんん……あなたの好きには……させない……！」

（ウネウネと触手が這う音・激しく）

「うくうう……乳首に……まわりつくなあ……っ！！……あつ……はああああ……あつ……」

（粘液を吹き掛ける音）

「んはあああつ……！……あ、熱い……！」

（服が溶ける音）

「んんっ……服が……溶けて……うっ……いやああ……っ！！」

（鎖がジャラジャラと鳴る音）

「くううう……み、見ないで——」

「……………」

「私の身体が……綺麗？　そうね……。これまでずっと大切にしてきたもの」

「それも……今日までね。あなたのこの、気色の悪い魔物によって蹂躪（じゅうりん）されるのだから」

「でもこれで、私の国が救われるというのなら……甘んじてそれを受け入れるわ」

「苦虫をかみつぶしたような顔をしているわね。そんなに悔しいの？」

（指をパチンと鳴らす音）

（ウネウネと触手が這う音）

「うっ……うううう……んっ……あふう……んっ……」

「この程度で、私が気持ちよくなるなんて……思わない事ね——」

（ウネウネと触手が這う音）

「……………」

「触手が私の乳房（ちぶさ）の上を動き回って……」

「ヌルヌルとした分泌液が……身体（からだ）にまわりついてくる……くっ……」

「淫魔の快楽には……逆らえないとでも……いうの？」

「くふうう……身体が……なんだか熱くなってきた……」

（ウネウネと触手が這う音）

「このような淫魔に……この私が感じるなんて——あり得ない……」

「うううう……あつ……あうううう……ぐうう……」

（ウネウネと触手が這う音）

「淫魔に胸をなぶられ、あまつさえそれに感じ始めているなんて……」

「あふうう……く、屈辱的ね……はああ……」

「身体が……快楽に囚（とら）われても……んあああ……んんん……」

「国を守るために……あつ、あああつ、ぐう——」

「この責め苦から逃れたければ、国を捨て、あなただけを愛せと？」

「それは……絶対に無理……。あつ……ふううう……うううう……ぐっ……はああ……」

「私は……あなたのように……人の心を捨てることは出来ない」

(指をパチンと鳴らす音)

(ウネウネと触手が這う音・激しく)

「あつ……！！　ふうう……ッ！！　ああああ……うっ……うううう……」

「私が……快楽に染まっていく様(さま)が……手に取るように分かるですって？」

「まるでこの魔物が、あなたの身体の一部のような……言いぐさね……んんっ……」

「フフツ、感じているとしても……それは、あなたの手ではないのよ」

「触手を使わないと、女に触れることも出来ないのかしら」

(指をパチンと鳴らす音)

(ウネウネと触手が這う音・首を絞める音)

「うっ……ぐううう……首を絞めて……殺したければ……殺してもいいのよ」

「あつ……あうううう……はああつ……ぐぎぎぎ……かつ、かはあつ！！」

(ウネウネと触手が這う音・首を絞める触手が緩む)

「ううっ……ふうう……はあ、はあ……どうしたの？　私を殺すつもりじゃなかったの？」

「その気になれば、いつでも殺せるという脅しなのね」

(ウネウネと触手が這う音)

「んふううう……あつ……今のあなたが……本当のあなたなのね……」

「女をいたぶるのが、そんなに面白いのかしら」

「んんっ……優しい顔をしているのに、こんなサディストだなんて……」

(ウネウネと触手が這う音)

「あつ……ああ……んっ……んふうう……あつ、ああああ……うっ……」

「なに……この感覚……」

「魔物のくせに……女の悦ばせ方を知っているなんて……はああああ……」

「淫魔が……これほどのものなんて……淫気(いんき)のせいなのね……」

「うううう……触手に性感を……開発されちゃう……」

「この魔物の愛撫に耐えられたものは……誰一人として存在しない」

「だから、泣いて許しを請えば、解放してくれると……？」

「——誰が、あなたの悦ぶようなことを……はううう……うっ……」

(触手が乳首を絞り上げる音)

「はああああつ！！　ううっ！！　いつ……痛……ッ！！」

(ウネウネと触手が這う音)

「んっ！！　はあああ……！！！！」

「乳房に巻き付いた触手が……こね上げるように動いて……たった……これだけで……」

「これも淫魔の淫気(いんき)の力——」

「はううう……ぞわっと……してきて……ダメ……このままじゃ、私……んんんっ！！」

「あつ……んっ……！！　触手が……乳首の周りをなぞって……」

「ぴりぴりとした快感が……私を押し上げていく……っ！！」

「うっ……くっ……この淫魔……が……私を気に入っているなんて……虫唾が走るわね」

「あつ……ひやううう！！」

「ああ……あつ、んんっ……イヤなのに……」

「身体（からだ）が……言うことを聞かなくなっている……？」

「ううう……うあ……ぐうう……」

「こんな……屈辱的な……辱（いじ）めを受けるなんて……うっ……くっ……やめて——」

（ウネウネと触手が這う音）

「うああっ……あつ……うううう……んっ！！」

「このまま続けられたら……私の……身体（からだ）がおかしくなってしまう……」

「んんん——っ！！」

（パチンと指を鳴らす音）

（ギチギチと触手が乳首を絞り上げる音）

「痛い……痛いっ！！　硬くなった乳首に……絨毛（せんもう）が絡みついて……はあああっ！！」

「ちぎれる……ちぎれちゃう！！」

「あうあっ……気持ち悪い……この触手を……どけて——」

（粘液が噴き出す音）

「うああ……ヌルヌルが……まとわりついて……くううう……気持ち悪い……」

「はああ……あつ、あああつ……絨毛（せんもう）が……先端をチクチク刺してきて……」

「い、痛い——」

「感じてなんて……淫魔に嬲（なぶ）られて感じてなんて……ない……」

「うっ……あつ、あつ、うああ……」

「はあ、はあ……胸だけで……おっぱいを食られて……」

「こんな……気持ちいい……のは……嘘……嘘なの……」

「離れなさい……！！　こんなことをしていても……私は、気持ちよくない……ッ！！」

（ガチャガチャと鎖が鳴る音）

「あうっ……うっ……うああっ……」

（触手が胸を締め付ける音）

「肌に吸い付いて……痛いっ……あつ、離れなさい……」

「こんなの……いやあ……はあ、はあ……」

「——抵抗すれば……私の国を滅ぼすと……？」

「卑怯者……ね……。んああっ……あつ……」

「うっ……うううっ……あつ……ぐうう——」



「うつ……うつ……こんなに……あうう……はああああ……」（熱っぽく）

「おっぱいが……繊維毛（せんもう）に扱（しご）きあげられて……我慢出来なくなつて……んあああああつ！！」

「……あつ……熱い……っ！！ 身体（からだ）の奥がジンジンして」

「—— はあああつ……うつ、うあああああつ！！」

「うつ……あはあああああつ……あうあああつ！！」

「あつ……あつ……うああああんっ！！！」

（チュルチュル吸い上げる音）

「うはあああつ……あつ……んんんっ……そんな……」

「乳首を……吸い上げちゃダメえ……おかしくなっちゃう……うあああああつ……！！！」

「はあああつ……こんなにされたら……私……自分の意識を……うあああああつ……！！！」

「頭の中が……真っ白に……ひいいい……」

「はああんっ……こんな状態で……うううっ……私……耐えられない……」

「アツ……ンッ……これも……国のため……あつ……ぐううう……！！！」

（チュルチュル吸い上げる音）

「あああんっ！！」

「乳首の先つぼの……くぼんだ所に触手の繊維毛（せんもう）が……入ってきて……ひいいい……んっ！！」

「やあああああつ……あつ……うあああああつ……んっ……んんんっ！！！」

「あつ……アアアツ！！ あぐううう……す……すごい……ひやあああんっ！！！！」

「触手に……弄（もてあそ）ばれて……感じてしまうなんて……ぐううう……こんな屈辱——」

（乳房を絞り上げる音）

「あつ……うあああああつ……はあああつ……あつ……うううう……きつい……っ！！」

「私にこんなことをして……あなた……嬉しそうね」

「魔物を……けしかけ……女を貶（おとし）めて……最低よ……」

（パチンと指を鳴らす音）

（触手がうねる音）

「うふうう……んっ……な、何か……来るう……この……感じ……」

「はっ……あつ……はあああああつ！！」

（ガチガチと歯が鳴る音）

（みちみちと乳房を締め上げる音）

「くふうう……あつ……いやあああつ……ダメ……ダメッ……」

「うつ……そんな……目で……私を蔑（さげす）んだ目で……見ないで……」

「あつ……ふうううう……！！ 何か……来そう……！！」

「目の前が……ちかちかして……あつ……」

「はあああ……あああ……いつ……イクの……はあああんっ！！ 私……イク……の！？」

「ひやああああんっ……あっ……あひい……んっ……」

「こんなの……我慢してたら……」

「私……おかしくなってしまうそう……なの……あっ……あああ……」

「はあああんっ……そんな……の……っ……」

「乳首で……私……乳首でイッちやう……耐え……られない……ひいひいんっ！！」

（触手が這い回る音）

「あっ……あんんっ……ひやあっ……あっ……」

「乳首を……コリコリされて……も、もう……。み、見ないで……くうう……」

「うっ……ううう……はあッ……はあああ……うああっ……っう——」

「あううう……うああっ……かはあっ……だ、だめ……魔物に……」

「淫魔にイカされて……しまう……やああ……身体（からだ）が……勝手に……」

「はああっ……うあっ……うあああっ……ふあああああああああっ！！！！！！」

（潮吹き音）

「あふうう……うあああっ……ひやうあああうっ！！ あ、ああああああっ！！！！！！」

「うあああっ……見ないで……見ないでえ……あああっ！！」

「イツ、イク……イクウウウ……」

「お漏らししちゃって……こんなの……いやああ……！！」

（潮吹き音）

「ひやふうっ……あっ……ううううっ……止まらない……いやああっ！！」

「いやあああ——っ！！」

「私に……まとわりつかないで……あっ……うあああああんっ！！！！」

（パチパチと拍手する音）

「はあ、はあ、はあ……うっ……こんなことをしても……私は……」

「はあ、はあ……私の心は……あなたに……エルネスト王子……には……屈しない——」

（コツコツと遠ざかる靴音）

「うふうう……はあ……はあ……くっ……私は……耐えられなかった……」

「エルネスト王子の下劣（げれつ）ないたぶりに……」

「でも、私は……国のためなら……これくらいの屈辱……受け止めてみせる——」

（触手が這い回る音）

「あっふううう！！ うああああああ——っ！！」

「動かないで！！ また……イッちやう……！！」

「はあああああっ！！ あっ、あああああ——っ！！」

（音声・フェードアウト）

「うう……くうう……」

「—— あっ……はぁ……あっ……ここから……逃げられないの……」

（ガチャガチャと鎖が鳴る音）

「私の力では、この鎖を引きちぎるなんて無理……ね」

（重いドアが開く音）

（足音・近づいてくる）

「おはようございます。それとも、こんばんは……ですか？ エルネスト様……」

（皮肉っぽく）

「ここに繋（つな）げられてから、どれくらいの時が経ったのか、私には分からないわ」

「三日もここに幽閉されているのね」

「今日も私を辱めるつもり？」

「あなたが変わらなければ、私の気持ちは変わらないのは、知っているでしょ？」

「そう……。私はあなたの奴隷。気の済むまで好きにしていいわよ」

（頬を平手打ち）

「痛……ッ！ 力で全てが思い通りに行くなんて、思わない事ね」

（パチンと指を鳴らす音）

（触手が這い出てくる音）

「うう……また淫魔をけしかけて……弄（もてあそ）ぶつもりなのね」

「——！！ 私がこうなることを期待していたですって？ 私のことを見くびりすぎよ」

「いいわ。やりなさい。快楽と苦痛で、私の心を踏みにじれないことを知るといいわ」

（触手がうねる音）

「……ううっ」

「腰回りに触手がまとわりついてきて……相変わらず、ヌルヌルして気持ち悪いわね」

「—— うっ……ぬるっとした感触が……股間に……来てる」

「くうう……そこはダメ……」

「淫魔が私の股間に興味を持ったというの？ あなたに似てイヤらしい魔物ね……」

「あっ……んんっ……股の間に触手が……あっ、あああ……うっ！」

「触手が太陰唇（だいいんしん）の上を滑（すべ）って……くっ……」

「—— くううっ……あそこが熱くなってきた……私が……感じているの？」

「そんなの……認めない」

「私を感じている淫気（いんき）に誘われている……？」

「変なこと、言わないで欲しいわね……うっ……ううう……」

「……………」 （気持ちよさ・気持ち悪さに耐えている）

（触手が這い回る音・粘着質な音）

「ピタピタと内股を這う触手が、これほどおぞましい感触だなんて……ね」

「んんんっ……!!」

（触手が這い回る音・粘着質な音）

「この程度の淫魔では……私を辱（いじ）めるには足りないわ——」

「ううう……はあ、はあ……うっ……お腹の奥が熱くなってきた……うっ……うううっ……」

「濡れてなんていない……。私は……淫魔に股間を愛撫されて……感じてなんて——」

（ぴちやぴちやという音）

「うううう……力が入らない……くっ、あっ……い、いやっ……」

「足を……広げないで……ま、丸見えになって……うううう……!!」

「ひゃああっ……！ み、見ないで……こんな風にして……見られてしまうなんて……」

「——侍女の誰よりも綺麗だなんて……バカなことを……言わないで……」

（足音・近づいてくる）

（粘着質な音）

「んあああ……あっ……触らないで……今触られたら……くっ……指を……入れないで……」

「あそこを触った指を見せないで……私は、あなたの指に感じたわけじゃないのよ」

「そうよ……私はまだ……処女よ。それを聞いて……安心したの？」

「あなた以外の人に、捧げたいものね。昔はともかく、今のあなたでは……」

（触手が蠢く音）

「あふうう……私の……望み通り……淫魔に相手をさせるですって？」

「そうね……あふうう……あなたより、淫魔の方がマシよ——」

（触手が這い回る音・激しく）

「あっ……んあああっ!! はあああっ……あっ!!」

「うっ……うううっ……陰唇（いんしん）に触手の凸凹（でこぼこ）した表面が行ったり来たりして……」

「あっ……ううっ……動かないで……」

「……くっ……うっ……んんっ……」

「私のイヤらしいところからだらしなない涎（よだれ）が垂れ始めているなんて」

「そ、そんなことは……ない——」

「——くっ……!!」

「性器の……周りの襞を……絨毛（ぜんもう）がまさぐって……辱（いじ）められてる……」

「私が……欲望を剥き出しにした淫魔に……辱められている……うっ!」

「……うっ……くっ……んんんっ……あそこを……押し開かないで……」

「今、あそこを開かれたら……うぐうう……滴（した）っちゃう……あっ、いやああ……」

（粘着質な音）

「うっ……うううっ……」

「隠し通せなかった……。淫魔にいじられ悦ぶとは……私は……くうう……」

「あっ……ふああああ……あっ……うああああ……声が……出て……んっ……」

「お、抑えられないなんて……」

「こんなに……感じるなんて……これも、淫魔の……力……」

「ふうう……うああああ……あっ……あああっ……んっ!!」

「うっ……んんっ……や、やめて……あうう……」

「私身体（からだ）が……淫魔の触手によって欲情させられていのね……」

「あっ、あああっ……はあああ……あっ……うううう……そんな……愛撫しないで……」

「うふう……あっ……あうああああっ……うっ……あうっ……!!」

「耐えなければ……ならないのに……」

「それなのに……身体が……勝手に……私の心まで持っていきそうになって……」

「私は……私は……」

（指を鳴らす音）

（触手が這い回る音）

「はあああっ! あっ……アソコの入り口に……絨毛（せんもう）が蠢（うず）いて……」

「ああああっ、溢れる……溢れる……うううんっ……あっ……はあああ……」

「あふうう……んっ……そこは……ダメえ……あふうっ……」

「あふあああっ……や、やめてえ……んっ……あああっ……んっ、くふう……」

「また……あなたに弱みを見せてしまうなんて……うう……うううう……あっ……はあああっ」

「んんっ……うあああ……んふう……うふう……んっ……んっ……あっ……」

「淫魔に……感じてなんかいない……」

「わ! 私は……淫乱じゃ……ないっ!! うっ……うぐうう……!!」

「——うぐうう……だ、黙れ……そんなこと言われたく……ない」

（触手が這い回る音・激しく）

「ふあああっ……あっ……あああっ……ううう……ああああっ……」

「んっ……細い触手が肉の扉の隙間に潜り込んで……」

「前後に擦（こす）るように動いてるう……あっ、あああ、あっ!!」

「んあああっ……あっ……いやあっ……あっ……はあああんっ……」

「ああああっ……んんんっ……ふわあああ……」

「あっ……あああ……んあっ……くふううん……っ!!」

（触手が蠢く音・緩やか）

「くううっ……うっ……ううう……」

「——どうしたの? んっ……ふうう……急に大人しくなって……」

「もう、飽きたのかしら?」

「ただ闇雲に私を攻め立てても、つまらない？　いかにもあなたの言いそうなことね」  
「あなたが何をしたいのか、それくらい知っているわ」  
「私の身体が快楽を求め始めているから、それをあえて与えないようにして、私を苦しめるつもりなんでしょ？」

「凶星だったようね。卑怯者の考えそうなことね」

（パチンと指を鳴らす音）

（触手が蠢く音・激しく）

「うあっ……あっ……はあ……ぐううう……うっ……ううう……はあ……」

「急に激しく……なって……怒ったの？　あ、ああ……あああんっ！！」

（触手が蠢く音・激しく）

「うあああっ……あふう……んっ……んんんっ……はああっ……くふうう」

「——あそこに淫魔が……吸い付いて……」

「やっぱり……あなたはこうすることを……望んでいるのね……」

「あっ……あうううう……き、気持ちいい……。こんなの……やっぱりダメ……」

「触手がクリトリスに……絡みついて、はっ……はあああっ！！」

「身体（からだ）が……しびれて……んっ……ぐうううう！！」

「んふう……あっ……あああっ……んっ……こんなにも——」

「うああ……頭も……身体（からだ）もおかしくなって……」

「腰が……腰が動いて……る？　あっ……感じては……ダメ……なのに……」

「——うっ……ううううう……」

「くううう……違う……私は……変態……じゃない……」

「あっ……ぐううう……はああっ……あっ……」

「あっ……うふうう……んあっ……んあああああっ……」

「変態じゃない……そっ、それ……は……ちがっ……ふうううんっ！！」

（粘液が溢れる音）

「……違う……っ！　私は……変態……なんかじゃ……ない！　私は……私は——」

（ガチャガチャと鎖が鳴る音）

「うっ……あっ、あっ……うあああっ……んっ……ふうう……やあ……やあああ……」

（触手が這いずり回る音）

「這いずる触手の先端が肉壁に触れて……んあああ……壁の奥をなぞるようにして……」

「あひいいい……んっ……粘膜を刺激して……はっ、はああっ……ぐううう……」

「あっ……あふううっ……あっ、あっ……うう……きやうう……んっ……！！！！」

「あうう……んっ……あああ……ううううん……あっ……はあ、はあ……」

「……あうう……か、身体（からだ）が……私の……いうことを」

「——快感に……支配……されて……いるの？」

「あああああっ……あっ……うっ……ぐうう……んっ……あふっ……んっ、んっ——」

「うううあつ……うっ……んっ……あつ……」

「お、おかしく……なりそう……はううっ……!!」

「うっ……はあつ……そ、そうじゃ……ない……」

「私は……快樂なんかに……うううっ……あつ……くううっ……」

「あつ、ああ……んっ……大陰唇（だいいんしん）の内側を細い触手が……くすぐるよう  
に愛撫して……」

「そこは……広げないで……はあああんっ……う、うう……ひい——」

「こ、こんなことになるのなら……ひううう……んっ……」

「あなたを……挑発するんじゃ……なかつたわね……」

「んっ……ああああ……ぐっ……ふあああ……あっ!!」

「ううう……はああんっ……アッ……ひやふう……んっ……うくう……」

「ううううう……あつ……ふううう……んっ……アッ、アッ……うううう……」

「んぐっ！ はあああ……まだ……まだ入ってこないで……」

「このまま……ずつと……んっ……クリトリスが……擦れて……」

「はああんっ、腰がピリピリって……ひううう……ッ!!」

（ヌチャヌチャと粘っこい音）

「ああああ……あああつ……あつ、うあああつ……き、気持ちいい……」

（触手から体液が吹き出る音）

「私の体液と……触手の体液がが混ざり合って……」

「ネバネバとした液体が私のあそこに……べったりして……ヌルヌルして……」

「気持ちいい……。んっ……そんな……快樂に飲み込まれたら……あつ、くっ……!!」

「ふうう……あつ……はああつ……んっ……あううっ……」

「くうう……あつ……あひゅうう……んっ!!」

「はあつ、はあつ……も、もう……いつそ……ううう……一思いに私の——」

「どうせ辱めるのなら……私の……んぐうう……一番恥ずかしいところに……」

「うっ……ううう……何も……言っていない……」

「口が裂けても……それだけは……ッ!!」

「あふうう……ッ!! あつ……ぐっ……あううう……!!」

「あつ……うぐう……うっ、うっ……あふう……んっ……あうう……」

「うふうう……んっ……ぐうう……あつ……んぐうう……ギギギギ……」

（後半歯を食いしばる音）

「ぐうう……ぐうう……はあ……はあ……うううう……あふうう……」

（パチンと指を鳴らす音）

（ウネウネと触手が蠢く音）

「うあああつ……何も……考えられなくなつて……」

「んんんんっ……来る……ううううっ!!」

(挿入音)

「あふうう……あつ……くつ……い、いやああ……あつ、アツ……ンツ……」

「ひいいあつ……!!」

「んぐううう……ぐうう……はああ……あつ!!」

「私の中に……入って……あつ……だ、だめ……あぐうう……入ってきたあ……ツ!!」

「うっ……ううううっ……はあ、はあ……う、うあああ……うっ……」

「ンツ……ンンツ……」

「お、大きい……あつ……がああ……んぐうう!!」

「い、痛い……それ以上入ってきたら……裂けちゃう……」

「あつ……あふうっ!! ああああああつ!!」

「こんなの……おかしくなっちゃう……私の……大切な所が……おかしくなっちゃう……」

「こんな拷問……続けられたら……」

「悦んでいない……ッ!! はああつ!! あつ!! こんなので……」

「純潔を散らすなんて……うっ……うううううっ……くっ」(後半涙ぐむ感じで)

「こんな形で……はあ、はあ……初めてを奪うなんて……」

「あなたは、どこまでも下劣(げれつ)なの……」

(ぐच्चゅぐच्चゅという抽送音)

「——くうっ……あああああああつ!! 奥に入ってくる!!」

「ああああつ!! ゴツゴツした……淫魔の表面が……」

「お腹の気持ちのいい所に……擦(こす)れて……いやああ……ツ!!」

「痛いの……気持ちいい……なんて……認めない……認めない……わ!!」

「——私を……辱めるのなら……早くしなさい……!!」

(パチンと指を鳴らす音)

(ブチブチと引き裂くような音・控えめで)

「あううううっ!! あつ……があああああつ!!」

「あそこの中で……触手が太くなって……ツ!! 痛い……ツ!!」

「はあああんっ!!! やめて……裂けちゃう……やあああ——っ!!」

「アツ……うあああつ……ンンンンツ……くはああつ……あああああんっ!!!!」

「熱い……お腹が……熱いの……ツ!!」

「うはあああつ……イツ……イクウ……んっ……イクううう!!」

「あああああああああつ!!」

(軽い潮吹き音・数回)

「ひいいいんっ!! アツ……アアアアツ……はあああああんっ!!」

「熱いの……いっぱい……溢れ出てくる……ひやひいいいんっ!!」



「あひいいいっ……あうううあああああっ……」

「ハアッ……ハア……うっ……ぐうう……ンッ……!!」

「ああああんっ!! 太くて硬いモノが……アソコの中で……暴れて……」

「な、なんで……こんなことで……気持ちよくなっちゃうの……んんんっ!!」

「私は……あなたを……許さない!!」

「うはあああっ……あっ……うぐうう……んっ……ひやううう……ッ……!!」

「イクッ……淫魔に犯されて……あっ……やああ……あああ……やあああああっ……!!」

「はあああっ!! イクッ……イクッ!! ううう……うあああああっ……!!」

「ああああああ——っ……!!」

（潮吹き音・数回）

「——あっ……あううう……うっ……うああ……ッ……ハア、ハア……」

「はあああっ!! あっ……あううう……!!」

（射精音・数回）

「やっ……やあああっ!! 子宮口（しきゆうこう）に……温かい液体が……いっぱい掛かってるう!!」

「あっ……あああっ!! あっ……中に……出されて……る……ッ……!!」

「お腹の奥で……ビクンビクンって……淫魔が……脈打って……」

「あっ……ああああ……はああ……いやああああ……」（最後力なく）

（ずるりと抜ける音）

（びちやびちやと液体が飛び散る音）

「ううう……ううううっ……あっ……あっ……あふう……くう——」

「私の……こんな顔を見られるなんて……」

「淫魔の……射精を受け止めてしまい……イッてしまった……わ」

「うっ……うううう……恥辱と屈辱にまみれながらも、快楽に身を任せてしまった——」

（ガチャンと手錠が外れる音）

「解放してくれるのね……」

「こんな惨めに……淫魔に純潔を奪われ、そして女の悦びに浸った私を見て満足したの？」

「でも……これは全て私の国のため……。だから……私は……耐えるわ」

「これからはずっと……私の心は折れないから」

「そして、偽りであってもあなたを愛します、エルネスト様——」

（足音・遠ざかる）

（重い扉が開く音）

「うっ……はああ……」（力なく床に座り込む）

「——うう……身体が熱い……」

「淫魔に犯されてからずっと……身体（からだ）が疼いて仕方ないわ……」

「これは、何かの呪いなの？ んふうう……」

「こんなのが……いつまでも続く……のは……さすがに保たない……うつ……」

「胸が高鳴り、呼吸も荒くて……」

「この状況を解決するには、性的に満たされるしか方法はないのかしら——」

「でも……中途半端に気持ちよくなつては……多分逆効果……」

「淫魔……エルネスト王子じゃないとこの身体の疼きを鎮めてくれないの？」

「くうう……こんなことが……許されるとは思わないけど……自分の手で満たせれば……」

「こんなことを考えたらダメね。なにか、気を紛らわせる方法があればいいんだけど……」

（ドアが開く音）

「エルネスト様……。こんな時間に……私に何の用なの？」

「私は別に……身体（からだ）を持て余してなんて……くっ……」

「何をしに来たの？」

「私の部屋に遊びに来た……？ 本当に、それだけなの？」

「また、淫魔を使って私を辱めるつもりじゃないの？」

「そうして欲しいのは私の方ですって？ 冗談を言わないで。私は——」

「……………」

「——何でもない。用がそれだけなら、出て行つて。今はあなたと話をしたくないわ」

「何でもなさそうな顔をしているが、淫気にやられ苦しいのだらうって？」

「……そうね—— あなたの淫魔に犯されてからずっと、身体が火照って熱いの」

（服を脱ぐ音）

「……これで……満足？ 私が何を求めているのか……知っているんでしょ？」

「お尻をあなたに向けさせて、こんな恥ずかしい恰好（かっこう）をさせるなんて……」

「相変わらず酷いのね」

（クンクンと臭いを嗅ぐ）

「うっ……顔を近づけて……そんなところの臭いをかぐなんて……変態ね」

「あなたに臭いを嗅がれて、あそこを濡らしている私も変態なのかもね——」

「そう言われると返す言葉はないわ……はああ……」

（粘着質な音）

「んっ……そんなに……あそこ……お尻の穴を見ないで——」

「牝汁（めすじる）が滲み出て、何を期待してるのか手に取るようにわかる……？」

「今の私の望みは、この身体の疼きを鎮めて欲しいことよ」

(粘着質な音)

「ん……つくう……ふう……。あふう……うふうう……」

「ふうう……んっ……あ、あ、ふひいいっ……指が……クリトリスを擦(こす)って……んっ……」

「はあああ……あっ、んんんっ……」

「あなたの指が私のあそこを開いて……ピンク色の粘膜……見られてしまうわ……」

「あっ……うううう……あっ!!」

(粘着質な音)

「そんなに……広げて見ないで……っ、そんなところまで見られたら……私……」

「あふっ……ん……ふううっ……あううう……」

「指が……入って……内側を掻き回されてるう……ひやふううう!!」

「あそこを掻き回されているだけ……なのにつ……はあああっ!!」

「もう……頭が……クラクラして……な、なんで? うふううう……」

(指を抜く音)

「あっ……はああ……はあ、はあ……何故……指を抜くの?」

「ひっ……!!そこは、お尻の穴は触らないで! んはああっ——」

「——そこを触られても……気持ちよくないわ……ひやああああっ!!」

「あっ……んんんっ!!」

(挿入音)

「——あっ、うああんっ……今度はお尻に……指が入って……ひやあああっ!!」

「あっ……はあああんっ!! 変な感じがして……んふうううっ!!」

(挿入音)

「ひいああっ……やめてえ……」

「おまんことお尻に……同時に指を入れたりしないで、はあっ……あひゅっ……」

「あ、あああんっ」

「うああっ……あ、あ、あ、あふああああっ……んっ……ふうううう……」

「い、いあああ……アソコが……むずむずして……」

「あふう……お尻の穴も……気持ちよくなって……あはああああっ——」

(抽送音)

「あっ、ああああっ……音を……立てないで……」

「きやふううう……お腹が……キュウキュウして……た、耐えられない……!!」

「いひやああっ……あ、あ、あふう……くっ……うっ!」

「ふあああっ……あっ……ううう……うああっ……んっ!!」

「お、お願い……指じやなく……もつと太くて硬いもので……」

「私のあそこを気持ちよくして……はああああ……んあああんっ!!」

「あつ、ああああんっ……ちゃんといます……」

「あなたのおちんちんで、私のおまんこを滅茶苦茶に犯して下さい！！　うううううっ！！！」（後半涙ぐむ感じで）

（指を引き抜く音）

「——んんんっ！！！」

（服を脱ぐ音）

（粘着質な音）

「あつ、ああああ……おちんちんの先が……おまんこに……当たっているわ……」

「ああっ、入れて……下さい——」

（挿入音）

「——んふううっ！　くひい……あ、あ、あああつ！！　何故……お尻なの……？」

「んぎいいい……はああ……く……苦しい……」

「お尻に……太くて硬い……男性器が埋まっていくわあ……あつ、あつ、きやふっ……」

「うぐうう……」

「あそこは……淫魔が……中ででしたから……汚いから……お尻に入れたのね」

「ひ、酷いわ……あぎいい……んっ！！！」

「いつ……ぐう……大きい……お腹の中が……いっぱいになって……あ、あ、あああつ！！！」

「あ、くううう……ひいつ……はああっ……はっ……はっ……はっ……」

「串刺しにされたみたいで……く、苦しい……のに……」

「お尻から……ごりごりした感触が……あそこに響いてくるう……！！！」

（抽送音）

「ヴァギナとアナル、されて気持ちいいのはどっちと聞かれても……」

「そんなの……ふああっ……んっ……ンッ……ああああっ……いい、言えな……いい」

「言えるわけないわ……あひいいいんっ！！！」

「あ、ああああっ……んふうう……うっ……あつ……ふああああっ……」

「んぐう……おちんちんがお腹の奥をゴリゴリして……あふうっ……んっ……」

「あ、あ、あああつ……はふうっ」

「あつ……ふうう……こんなの……初めて……で……うう……」

「お尻が……ごりごりされて……気持ちいい……うはああっ——」

「私は、お尻で……気持ちよくなる……淫乱な女じゃ……ないわ……」

「あつ……くうううっ！！！」

「うふうう……なに……この感覚は……ひいいんっ……ひんっ！」

「あつ……うふうう……んっ……頭の中が……変に……」

「はあ、はあ……汚いところなのに……」

「それなのに感じて……おかしい……絶対におかしいのに……」

「んっ……こんなの……すごい……ふううっ……あっ……あふうんっ!!」

「頭の中がしびれてきて……ああああ……」

「気持ちよくなること以外……考えられなくなつて……」

「気を強く持たないといけないのに……んはあ……あっ……」

「ぐちゅぐちゅつて、イヤらしい音がして……はああん……」

「お尻の中のおちんちんが熱くなつてゐるのお——」

(抽送音)

「っはああ……あああ……んん……ひやああ……ひいん……」

「あっ……あぐううう……お腹に力が入つて……ぎゅつて締め付けてしまうわ……」

(じゅぶじゅぶと液体が噴き出す音)

「はああっ……お腹の中が……掻き出される感じが……して……んっ……」

「ふううっ……うあっ……あ、ああああ——っ!!」

「あああんっ、ああ……はううっ!! あそこから……愛液が……溢れる……」

(抽送音)

「……はあっ、あふう……あ、あ、そんなにしちや……お腹が……」

「本当におかしくなつて……ひやああっ……」

「……ああ……私……イッてしまいそうで……んっ……」

「はああっ……ううう……んっ……!!」

「こんなに気持ちいいなんて……そんなの……そんなのおかしい……」

「これまで……そんなことなんて……あ、ああああっ!!」

「イキたい……イカせて……」

「そうしないと……私……気が狂いそうで……」

「あああん……きやううう……んんん——っ!!!!」

(抽送音)

「あふうう……私の……母国を捨てるならイカせてくれるの？ そんな……」

「選べだなんて……そんなの……どっちも……選びたい……。片方だなんていやあ……!!」

「あっ……ぎい……このまま……イケなかったら……私……壊れてしまうわ……」

「でも、それだけのために……私の国を捨てるなんて……できない……」

「あっ……あっ、んっ……んんんっ!!!!」

「ひやふう……こんな……あっ……お父様、お母様、お兄様……」

「私……私……ああああ……んっ……こんな……耐えられない……我慢出来ない——」

「今まで……我慢してきたのだから……少しくらいのわがまま……してもいいよね……?」

「んんんっ……あっ、あっ……あああああんっ……」

「捨てます！！ 私は……国を捨てます！！ ですから……私をイカせて下さい！！」

「気が狂うほどイカせて、国を忘れさせて下さい！！」

（耐えられなくなつてやけくそ気味に）

（抽送音・激しく）

「あふうう……んっ！ あっ、うああ……気持ちいい……」

「お尻をおちんちに犯されるの……気持ちいいの……」

「はあああ……うああっ！！ イッ、イキそう……んくううん！！！」

「おちんちんがビクビクし始めてる……出そうなのね？ んあああ……あっ……」

「出して……。私のお尻に……沢山の精液……出して……真っ白に染め上げて……！！！！！」

「——あふうう……んっ！！！」

「い、イク……あ、あくああっ！ あふううっ……んっ……あっ……はあ、はあ……ッ」

「あああ……いふう……っ！ はひやあああああ！！！！」

（潮吹き音・激しく）

「ふああああああっ！！ 気持ちいい……！！ んあああ——っ！！！！」

（射精音・激しく）

「ああ……熱い……精子がお腹に入ってきて……はああっ……」

「お尻が……エルネスト様でいっぱい……ふわああああ……あふううっ！！！！」

「あっ、ひやあああ……うっ……お尻で……イッちやった……んんっ……」

「こんな……はしたないところで……あううう……」

「ま、まだ出てる……お腹の中……いっぱいになってしまつてゐるわあ——」

「ふうう……んっ……あっ……あふうう……ひやふううっ！！」（切なげな感じで）

（男根を抜く音）

「うっ……ううっ……！！！」

「あっ、はああ……お尻から……精液が溢れて……うううん……はあ、はあ……」

「もつと……もつとして下さい……エルネスト様……」

「あなたの……性奴隷になりますから——」

（挿入音）

「はあっ！ んっ……！！ 今度は……あそこに……嬉しいです」

「あっ……ああああ……んっ！！！」

（音声フェードアウト）

私が快樂に堕ちてから一週間後、私の国はエルネスト王子が率いる軍隊に滅ぼされた。

何も知らされていない私には突然の出来事で、どうしてそうなったのか、考える余裕すらなく……

捕らえられたお父様とお母様、そしてお兄様が私の見ている前で首を刎ねられ処刑され、私はただ呆然と目の前の悪夢を見ていることしかできなかった。

「ああっ……ああああ……私のせいなのね……」

「国よりも快樂を選んだから……こうなってしまったの？」

「ああああ……ごめんなさい……ごめんなさい！！」

「あっ……うああああ……いやああ……」

「いやあああああー……っ！！！！」

(音声・フェードアウト)





6. サークル挨拶音声

「サークル、ケチャップ味のマヨネーズ」

「この度は本作品をご購入いただきありがとうございます」

「本作品は音声作品です。イヤホンやヘッドホンなどを使用して」

「椅子に座ったり、ベッドに横になるなどしてリラックスした状態で聞き下さい」

「音声に気をとられすぎて椅子やベッドから落ちたり」

「物にぶつかるなどして怪我などしないようお気をつけ下さい」

「また、イヤホンやヘッドホンの端子が抜けていることに気づかず」

「スピーカーから大音量で本作品を再生した場合、あなたの人生に深刻な

問題を発生させる恐れがありますのでくれぐれもご注意ください」

「それでは、本編をお楽しみ下さい」

7. 体験版ダウンロードの案内音声

「この度は体験版をダウンロードいただきありがとうございました」

「体験版をご試聴いただき、気に入っていただきましたら

製品版をご購入いただけるととてもうれしいです」

「今後ともサークル、ケチャップ味のマヨネーズをよろしく願いたします」